

# お祭り

校長 山田 浩之

私事で恐縮なのですが、私の妻は、毎年、七月七日前後に実家のある村上市に帰ります。七月七日は、村上大祭が行われる日です。その日が近づいてくると、どうしても行きたくなるようなのです。確かに、三味線や太鼓、かね、笛の響きが生み出す情緒と豪華絢爛な屋台（おしゃぎりなど）は、その謂れを知らない者をも惹きつけます。妻も、子どもの頃、その屋台を引っ張り、お祭りに携わっていました。

私はというと、新潟市で育ちましたが、新潟まつりとかかわりがほとんどない地域でしたので、新潟まつりと言えば、「川びらき」と言っていた花火大会しか知りませんでした。ですから、お祭りとは、参加するものではなく、見て楽しむだけのものでした。

今年は新型コロナウイルス感染症後、希望者による行列への参加が再開されました。民謡流しも昨年に引き続きPTA主催で行われました。万代太鼓部も、お祭り広場で、その腕前を披露しました。どれも、子どもが大人と一緒になつて、お祭りを楽しむことができました。別の言い方をすれば、子どもたちが、お祭りをする側、多くの人に見られる側に立つことを楽しんだのです。久しぶりの行列に参加した子ども

たちは、暑さと待ち時間の長さから、結構疲れていたことと思います。それでも子どもみこしをかついで（持つて？）「わっしょい、わっしょい」と掛け声をかけながら古町通りを練り歩き、たくさんの人から拍手を送られ、喜ばれました。子どもたちは、その場でしか感じられない高揚感を味わうとともに、地域の一員であることを実感したことと思います。

学校では、地域を知り、地域の課題や未来について考える学習を行っています。それは、自らの地域を客観的にとらえたり、主体的に考えたりするとても大切な学習です。それに対して、お祭りは、より一層地域と一体となつて参加している子ども自身も楽しみながら、それを見ている地域の人々も楽しむ、そんな活動です。

現代の個人消費社会において人と人との豊かな関係性を育む場は、限られています。まして、子どもが、大人と一緒になつて文化を担う機会は、貴重です。私自身は、子ども時代に経験できなかったことなので、今年の新潟まつりに参加した子どもたちを羨ましいと思いました。そして、地域への愛着を高めたのではないかと考えています。